神

柚

次詞并歌為考名
さま未をいさてのわてかてぬ
もをもてそそとある須
寺は
紬頃そそ[illegible]の杉ふる雨を
いてさてて杉る柚を
此老源氏か二女の秋より
女宮の後まての事あり

斎宮女御徽子女王 歌合
承平六年 斎宮寮 歌合
天暦二年入内 同三年四月
為女御生 規子内親王
為斎宮 群向伊勢 時
母女御 波瀾 律師
この巻 長保 後の事
初例 今 基
のみ 書 例
といふ 也

いとみそぢあまりひとつばかりのとき 斎宮十字
あとはてゝかくもそ
うき世を

大和
おもひそめ
なんぐもと
ともちまにとも
きよいかん
清め 斎
斎宮の事 清め 物語

院の
桐壺帝也
[illegible]
[illegible]
[illegible]

二向教
人の
人も
らく
みと
名こ
それ
屋そ

十六日、
西洋
屋そ

一、神宮祭祀行の日、
その
穢の
中
帳の
屋そ
中

帳の屋
幕とし
名処さ
中
差
豫定
名
鎌

官人一
西京
大中納言
四人
勅使
中納言
参議
名
一人
長奉送使
一人
一人
一人

一人四位六人長奉送使中納言
若狭守兼弁官史申稽留各一人
ことと奏聞下外記
今集議行の日御斎会と勅使と
河原より倍参して帰参を
長奉送使より後まで
もって上洛の時も陽明
すみやかにゆるくいたすの
奏聞をれば
脚力して伝ることを

きぬんことめ
御斎のこと郷又勅使をと
院の御ふくろを
桐壺の帝御ものがたり
より為てみてより
重のほそをも
御ものがたりの文也
かうもくも是に弁をまつを
ねこのなかさんも畏れも
なよいうまで

後令栗忌部（ノトリノイミベ）祖天日鷲神（アマノヒワシノカミヲ）
造木綿（ユフ）上者 旧事本紀
ある神なれば
其ふるそ
おなじ中をいたゞきもつる神
其中をきよめ
ゆゑなれば
やしろ
地神と書 一切の
地神とんあるとも

まもる處也
忌部あるとき 又の処
さても忌部
いるとき
ある也
その御社（ミヤシロ）に 神宮の女別当
女（ニョヅ）ども 神宮の女別当
院宮家家司 別当の
よそあるも
ふるの神そ 神主の

十六日
十七日

作て黄楊のおとこむ
もさこそすれ金作して
松露を布施そうこう万寿
の宮にて（リウ）坊官の頭の指を撥て誉
て入てとこと也
玉ふれをかてうれを
あるにつもそこの門のさま
八省とそてつけ大将殿の
大将殿とそ八省のさまとも

如来の八省の東西まて
（リウもとそうこと）
玉ふもの
別れむ（心房の女房）
そうこう（あるとも）
車の（或）
叶て叶（日）
（うさうから）
二条院のうへ
二条院の（京極殿）

私の
行はん
しきみ
おい
ふそく
むし
申の
源の
そう

又このもちて
ばあらりて　源のあそ
ありて　東司のかれてあるち
ありて
けきるおき
あくりてなりて
富士申のを　三骨ちる人
申大将の一ちそ　三百
のんをろそて　今のおきち
いちる近来有司のころくら
そのお申のとあるんをと

のうねこおろ
そそそそ申言腸とし諒せん
とおわそそ
院のおろのなる
者宮の乱こわこもちぴそ
母そ仙中そてあてそれろよ
三こもくかそゆく世の
こうそ角をいう
戚夫人の
史記 呂后紀曰呂后最怨戚

夫人及其子趙王遍令下永巷(別宮名)
召趙王遍(上)
四戚夫人而召
大后遂斷(ニ)戚夫人手足去(リ)
眼燻(ニテ)耳(ノ)飲瘖藥使居廁中(ニ)
命(ケテ)曰人彘(ト)
みもんめやる
戚夫人のそそるやうにめ
はあそれとまと
うむそうんこと
ひそあるよ也

天のたゆまず
[illegible]
所々無常を告るを見ては
さくさく人のなきを
そもそも力あること
[illegible]
[illegible]
きくの起
とて死
をとそ
このごとく
佛道のなること

起世の言
権のみ時死
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

六十巻
本書疏巻 玄義十巻 文句十巻
止観十巻
未書疏巻 釋籤十巻 疏記十巻
弘決十巻

天台宗巻也

是号二十大部
日本国近日主上學六十巻給例也
一宗院令學此六十巻給例也

いみてえ 源氏のこと

[illegible]
白虹日をつらぬくこと
史記鄒陽傳曰昔荊軻
慕燕丹之義(ヲ)(ニ)(ノ)(ヲ)
畏之注虜動曰燕太子丹質
於秦始皇遇之無禮丹亡去
故厚養(テ)荊軻令西刺秦王(ニ)(ヲ)(ノ)(ヲ)
精誠感天白虹為之貫日也
如淳曰白虹兵象日為君列士
傳曰荊軻及敗後太子自相

氣之見虹貫日不徹曰吾
不成矣後荊軻死事未至
太子丹白虹日をつらぬくこと
之知其(ノ)(ヲ)(ヲ)
かくのごとくさまをかへ
もし今後宮に
おそろしきことの
まいらんとそ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

もの其日ハ　文帝の御為
次の日ハ　母君の御為
又の日ハ　弟三日の
桐壷帝の御為
五巻の日とこゝに法華経八巻
開結の二経をうつして初日
朝座夕座に一巻つゝ講
うけたまはりて五ケ日ハ弟三日
五巻をあつる也　提婆品を
講する日ハ自行品あるべし

世のつまりに
江徽尼をはじめ
もゝ尼あつまり
もゝ尼ハ　諫師也

ここゝゝ
提婆品　採薪及菓蓏隨時

茶敬典のく
法華経を
茅つこ水こ
みてもち
みてうえ
より あり 中
ハ種の 村

受戒也

遣使節人於鎮国寺
明日可参之状又新人於寺
令廻仰了参
仁寺殿
北山殿
使用去廿三日
放後女蔵人
土器進自御
座島王卿下座拝領
云々
踏哥節会也

廿三日同若有
子日
若當子日一二
人参次若菜羹
御箸桐
座王
受
踏哥節会也

[illegible]
むすめのもとより
御のもとへ
うめの花
持佛堂
梅花
枝
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるまうち
まて如てゝ
——さゝゆ
くてけて
あゆゝつり
白馬節會
ゝてゝも
十節録云
白馬節中
来也

天武十年四月七日天皇御
向小殿而宴之是日親王
諸引入内安殿諸臣皆侍于
外宴殿共賜酒及奏音樂是夜
亦七日の節会如元日儀
庚寅六年四月七日宴奉
豊明節会白馬青馬
見儀如元日
文武天皇
よりて

致仕辞表 大臣致仕始

[illegible]

[illegible]

[illegible]

薔薇をよめる

そまてふとよみ侍りける

こゝろをかけてこゝろをかけてこゝろをかけてこ

士猶恐失天下之賢人子之曽慎毎國驕人
庵主の何ゝ 此老の初
文王は桐壺帝 武王は朱雀
院 然れ共 冷泉流の唯
春立ちかへるとの成
のたまふ
そもそもや 冷泉流いまゝ
四位つきの
ふ也

そもそもや 此老の文也
うんのえんかく 室章退
もゝそやと 腰痛の疼痛
きこえて
南こそ三字服也 注
書得ともや 朱杜の
いひそ
ゝりのさ 哀毎
ちかもて 新句古今比

ᠪᠣᠯᠵᠤᠮᠤᠷ

墨付百廿枚